

研究成果―序にかえて

三年間にわたって共同研究「大名屋敷におけるサロン文化の研究―『弘前藩庁日記』を中心に―」を行ってきた。平成十三年度に実施した国文学研究資料館共同研究「大名屋敷の饗宴の研究―『弘前藩庁日記』を読む―」は、その助走であった。

研究代表者が『弘前藩庁日記』に演劇上演記事が頻出することを見いだしたのは、平成三年のことである。元禄までの演劇関係記事は『若衆歌舞伎・野郎歌舞伎の研究』（八木書店）に翻刻と影印を紹介した。これが平成十二年のことである。『弘前藩庁日記』の膨大な量と日常業務の多忙のため、この資料の内容の本格的な研究調査にはなかなか踏み込めなかったが、これが演劇のみでなく近世文化全般にわたる好資料であることは、見当をつけることができた。弘前藩江戸屋敷の演劇上演の場には、瞥見しただけで、観客として山鹿素行（儒学者）、渋川春海（天文学者）、狩野養朴（絵師）、喜多七大夫（能楽師）、本阿弥光由（刀剣鑑定家）、大橋宗桂（将棋士）、小野次郎右衛門（小野派一刀流師範）など、当時の錚々たる文化人の名が見られたからである。共同研究はこの推測を裏付けるべく、近世演劇の研究だけでなく、江戸時代の文学・学芸・美術・政治・食文化などに業績を有する専門家に参加を呼びかけ、年間二〜三回の共同研究会を開催し、『弘前藩庁日記』を中心資料とする研究発表と討議を重ねた。その成果が本冊子である。

当初、研究会では、『弘前藩庁日記』の記事に注をほどこしていき、この資料の文化史的価値を解明することを目指した。しかし解説を進めるうち、注の形式では収まりきれない本資料の豊かな内容が明らかになっていき、いまま少し自由な形での研究発表と討議という形式の研究会に脱皮していった。この研究発表と討議のテープをおこしたものを、本冊子は掲載している。

研究発表は、それぞれ新見が満載されたものであり、それについての討議も、実に学問的刺激に満ちていた。共同研究の面白さを実感する時間だったと言える。共同研究の実を上げ得たのは、参加者それぞれの充実した予習蓄積があったからである。若手の研究協力者（オブザーバー）たちの、本資料解説にむけた情熱と豊かな勉強量が、この共同研究のレベルの向上に資したことは、特筆に値するだろう。キャリアを積んだ研究分担者の見識が、これらの研究発表についての討議の質を保証した。

また、共同研究会と並行して実施した各地の文庫・図書館における大名家資料の調査も、研究発表と討議の内容を豊かにした。演劇関係記事や関連する文化事象についての記事は『弘前藩庁日記』にかぎらず、大名家の記録資料全般に発見しうるものが明らかになったのである。

研究発表と討議の内容は、本冊子に採録したそれぞれの記録によらねたい。ここでは以下、簡単な紹介を行うにとどめる。

金子健氏の「今治市河野美術館所蔵『歌舞伎遊楽図屏風』について」は、大名邸での歌舞伎上演を如実に描く、新出の絵画資料発見の報告とその分析研究であった。文字からのみ想像していた当時の大名邸での歌舞伎上演が、絵画によって視覚的に知ることができたのは画期的なことで、参加者の驚目をあびた。観客や舞台について加賀藩前田家の記録などと響き会うことも、参加者から指摘された。

鈴木博子氏の「池田家・前田家記録からみた『弘前藩庁日記』の芸能記録について」は、氏による新しい資料の発見の報告とそれらが『弘前藩庁日記』の記述とどう関わるのかについての考察であった。岡山藩池田家と加賀藩前田家の芸能記録は、『弘前藩庁日記』に劣らない演劇の藩邸上演の好記録で、『弘前藩庁日記』だけでは分からなかった事象が、これらを会わせ見ることでも明らかになることがある。とくに当時の芸能人たちが、複数の大名家に出入していることが確定された点、また彼らの諸大名との親密な交流については、重要な指摘であった。さらに土佐少掾の没年についてなど、演劇史上の新事実の抽出は、新しい資料によるものであるだけに、説得力の高いものであった。

林公子氏は「『弘前藩庁日記』の記述と「別紙／別帳」との関係」について発表された。本共同研究会による弘前市立図書館の探訪で見いだされた『満佐姫様御鉄漿初御祝之次第 扣』を『弘前藩庁日記』にいう「別帳」の一つではないかと指摘され、『弘前藩庁日記』の成り立ちについて考察され、この資料の構造の解明を進められた。

加賀佳子氏は「津軽家上屋敷における芸能上演と、津軽家の人々・客の関係」について二回にわたって詳細な発表をされた。本冊子に付載した索引や充実した手控えの系図などを利用し、『弘前藩庁日記』に登場する人々の正体解明を進められた。その結果多くの津軽家の客の実態が浮かび上がり、サロンを形成する人士の交流が明らかになったことは貴重な成果であった。

渡辺憲司氏も「『山鹿素行年譜』について」「津軽家大名サロンと文芸―山鹿素行との関連を中心に」と題された、二回にわたる発表を行われた。弘前藩のサロンを形成する中心人物として山鹿素行をとりあげ、『山鹿素行年譜』や『配所残筆』を用いて津軽家との関係を抽出、芝居上演の場を「一門の結束を強めるための場」として捉えることができるのではないかと、この重要な指摘をなされた。

青木直己氏の「津軽藩江戸藩邸における菓子饗応―上菓子大成期を中心に」は、弘前藩邸での演劇上演が、一方で酒食や菓子による饗応の場としての性格を色濃く持っていたことに注目され、その時期が上菓子の大成期に重なることを指摘された。観劇の最中に客に供される料理や菓子の実態が明らかにされ、弘前藩邸の演劇上演の場に新たな照明をあてるものであった。

これらの研究会では、参加者すべてが発表の機会をもったわけではない。ただ冒頭に記した、平成十三年度の国文学研究資料館共同研究「大名屋敷の饗宴の研究―『弘前藩庁日記』を読む―」で発表した研究分担者も多く、それらの成果が本冊子の討議に反映していることは言うまでもない。

研究発表と討議のテープ起こしを担当してくれたのは、鈴木博子氏である。労の多い作業を誠実に成し遂げてくれたことを銘記し、感謝の意を表したい。

本冊子に付載した「津軽家江戸屋敷役割分担索引」は、平成十年から十三年の科研（基盤研究C・10600437）報告書「初期歌舞伎と沖繩の組踊―大名家における歌舞伎上演を回路として―」に収録した「仕事索引」を改訂したものである。この索引作成にあたったのは加賀佳子氏である。労作の作成と提供にも深甚の謝意を表したい。

なお、本冊子は科学研究費補助金の報告書という性格に鑑み、ごく限られた範囲にのみ提出するものである。したがって掲載資料については、研究代表者の責任においてコピーをそのまま載せた場合があることをお断りしておく。

（武井協三）